

病気で生死の境をさまようても元気に帰省することができたのに、と仏前に手を合わせ御冥福をお祈りしました。

戦争は罪なき人を殺し子供から老人まで無差別に攻撃され、最近では自爆テロが頻繁に起き攻撃すれば報復する。憎しみは憎しみを生む戦争を、この世から無くすることが、我々の望みたいところでもあります。

中支戦線の苦闘記

宮城県 斉藤 敬治

二男五女の兄弟の長男として、農業を営む普通の生活環境の中で農業に従事しておりました。昭和十六（一九四一）年の徴兵検査において甲種合格は当たり前のことで肩身の狭い思いをせずに済みました。

昭和十七年四月十日で同じ検査をした者では最終の入営となりました。本来は昭和十六年十二月一日の入営でしたが、何の理由か判明しなかったのですが同郷の友人と差し替えとなったようでした。

出征の日がやって来ました。自宅の広い前庭には親類縁者や近隣の人々が相集う中で、盛大なる壮行会を催して頂きました。興奮して胸の高なる中で、これまで人前で話したこともなかったので緊張した面持ちで「皇国のために身命を賭して御

奉公して来ます。家の事は宜しくお願いします」と誓いの言葉を述べ、歓呼の声に送られ、懐かしの生家を後にしました。

途中、北上川の梨の木渡船場を舟で渡り、鹿又駅より列車に乗り、大勢の皆様や古里の山川とは再び相見えることはできないであろうことを念頭に、車窓より思い切り手を振って別れを惜しみました。今でも、この時「汽笛一声」門出をしたのが昨日のこのように脳裡に焼き付いています。

仙台の集合地までは叔父に付き添って頂いて一泊し、その後は引率官の指揮下に入り、群馬県東部第四十一部隊第一大隊第二中隊第五班に無事入隊、厳しい内務班の仕事や迫撃砲の教育が始まりました。その最中に私と入隊日が差し替えとなりました。四カ月早く入隊した同郷の友人と、酒保にパンを買いに行った時、偶然に再会しました。彼は赤城嵐で大変だったと輝^{あかぎれ}だらけの手を見せられ「ご苦労だったなあ」と慰めて別れました。程

なくその友人が満州方面に派遣されるのを見送りました。

一期検閲も何とか無事終了する間際になって中支派遣の噂話があり、七泊八日の外泊が許可されました。長い年月が経った感じで、籠の鳥が放されたごとく、飛ぶような気持ちで家へ帰ったら、突然だったので大変驚かれました。

しかし、アツと言う間に、また別れの日となりました。帰隊後、先の噂話が現実となり、命令が出て、八月十五日、広島県宇品港に軍用列車で到着、直ちに乗船、出港、海上も無事に十八日、上海の呉淞港に上陸しました。さらに揚子江を船で溯行、南京からは軍用トラックで孝徳京子に駐屯する中支派遣軍広五五三一部隊本部通信班に配属となり、ここで二カ月間の通信教育を受けました。

モールスや暗号等大変な厳しい長い二カ月間もアツと言う間に終了、十月に一等兵となり、これからいよいよ実戦に取り組むこととなりました。

作戦に参加することなく警備が専らで、湘桂作戦に参加する部隊が続々と、その方面に向け、作戦を繰り返しつつ大移動するのです。我々はその部隊に後続しての行軍でしたので、比較的散発的な交戦のみで順調な行動ができたのですが、途中の常德作戦はいかに凄まじかったか。

差し掛かった衝陽城に、他部隊の歩兵が城壁を目掛けて挑むが上から突き落とされ、石に阻まれて苦戦している様子に、我が迫撃砲が掩護射撃を開始したのです。その時、高い山の部隊本部への通信連絡のための延線機を背負い走り始めたら、稜線上から敵のチェッコ銃が雨霰のごとく乱射してくる。伏せては走り、また伏せて、一〇〇メートル程の本部に辛うじて無事到着、使命を果たしました。

ホッとしていた所に部隊長が見えられ「大変だったが無事で良かったね」と稿の言葉を賜り、嬉しくもあり恐縮したこともありました。あの危険だった状況下で命拾いをしたのが不思議でならな

かったが、内地からの同時期の便りでは、父が亡くなっているの、あるいはあの世から比護して下さったお陰ではと心で手を合わせたのでした。

昭和十九年四月、上等兵に進級。一層の責任の重さを感じさせられました。休まない行軍で桂林を過ぎ柳州に到着した頃より、米軍機の飛来が激しくなり、機銃掃射や爆弾投下に松林の中に避難するなどして何とか河池に到着しました。しかし行先が一八〇度転換し、来た道を引き返し始めました。どうしたのかと思ったら揚子江沿岸の警備の命令が下ったとの事、難渋して来た数カ月、割り切れない気持ちで再び毎日の行軍が開始されたのです。

どうにか落伍もせず目的地の九江に到着しましたら、ここで日本の無条件降伏を知らされ、これまでの不可解な行動が撤退作戦だったことを知り、全身から力が抜け呆然としました。

早速、武装解除となり、市街地より離れた農村の民家の収容所に入れられました。この民家は「保長」と言って部落の世話役の家とのことでした。

どういう訳か私と鈴木の二人は母屋の家族と一緒に生活することになりました。何でもどこが気に入られたか不思議でならなかったものです。同僚達からは羨ましがられ、家に帰った気分を満喫させて貰いました。この事実からどこでも人間社会は皆同じで、心と心が通い合えば争いもせずに済むものと教えられ学んだのでした。私共は何でも異国にこのような状態で来たのか、心からの反省で胸の痛くなる思いがしました。この教訓をしっかり身につけ誰とでも話せば分かるという無言の教えをこの地で学びました。

海を越えての大きなこの収穫を胸に秘め、厚くお礼を申し上げつつ、昭和二十一年六月、呉淞港を出港、博多港に入り、再び踏むことの無いと思つた日本の大地に上陸しました。「あの一步」は実に感無量でした。各種検疫も無事に済み、復員列

車にて一路、故郷を目指して進行する途中、空爆を受けた市街地の荒涼たる姿には目を覆いました。しかし心だけは早や故郷に向かい何の連絡もなかったので「只今、帰りました」と敷居を跨いだら皆驚き喜んで貰いました。

その後、元気で見送ってくれた父の霊前に額ずき「お陰で危険を護って頂き無事帰る事ができました」と手を合わせ報告しました。以来、皇国のために散華した戦友の分まで祖国復興のため努力し、家業に精励し、現在も元気で孫達の成長を楽しみに毎日を送っております。

私と入営日が差し替えになつた友人が戦死されたことを聞き、墓前に額ずき、そのままだったらと、生と死は壁一重を痛感して帰りました。